福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

馴染みすぎてはいけない：即興的、創造的ファシリテーション考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 冨永, 良史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029212

馴染みすぎてはいけない

即興的、創造的ファシリテーション考

冨永 良史

自転車の記憶。
同級生の中で、一番遅くまで補助輪を外せなかった。
2輪で進むなどと、そんな不安定なこと
想像できない恐怖だった。

父に後ろを支えてもらいながら練習した。
頼りなげにペダルを踏み、力を込めてハンドルを握り
よろよろと進み、転び、また怖くなった。

もう自転車になんか乗れない、と思っていたのに
ある日、スイスイ走り回る近所の友達につられ
思い切って強くペダルを踏み込んだら
いつの間にか、みんなと一緒に走り回っていた。

ハンドルを握る手からは力が抜け
体が勝手にバランスを取りながら
自在に乗りこなすようになっていた。

あっという間の変化、あまりに急に起きた上達に
自分で自分が信じられなかった。

そうなってからは
補助輪がついていた頃の安定感は
曲がることが制約される窮屈さに思えた。
不安定さの恐怖など、霧消していた。

1. 馴染む

補助輪なしで乗れなかった時の私は、足をどう動かすとか、ハンドルはどう握るとか、傾いたらどうするかとか、あれやこれやと考え、考えるものだから動作がぎこちなくなり、だからスピードに乗れず、バランスを崩して、だから乗れない、という悪循環だった。

乗れるようになった時の私は、手も足もバランスの取り方も、理屈で説明したら複雑なすべての動作と判断に直感的に馴染み、あれこれ考えることなしに、それができるようになったのだろう。自転車は、熟考して乗れるようになるものではないだろうから。

馴染むとは、複雑な手順を、立ち止まって考えることなくこなせるようになること。私が無意識のうちにこなしている様々な行為は、例えば朝起きてベッドから立ち上がるといった、最も単純なものであれ、理屈で説明すれば極めて複雑な手順を踏んでいる。馴染んでいるからこそ、いちいち考えなくてもこなせる。もし私から馴染むという能力が奪われたら、仕事ができないどころか、まともに日常生活が送れないだろう。

しかし一方で、馴染みすぎれば、様々なことを馴染む前ほどには感知できなくなる。補助輪なしで自転車に乗れるようになったばかりの頃は、バランスの微細な変化、吹き抜ける風の心地よさ、通り過ぎる景色のスピードが確かに感じ取れたのに、高校生の自分は、そのようなことには全く無頓着で、テストや学校生活のあれこれを考えながら自転車に乗っていた。私の意識は、自転車に乗りながら自転車にはなかった。いや、自転車どころか、「今この瞬間」からも遊離していたように思う。

馴染む能力は私にとって、かけがえのないものだが、馴染みすぎることで、失うものがある。自転車にまつわるあれこれを失っているだけなら、まだ救われる話だが、私の馴染む

能力は、自転車以外のあらゆることに発揮される。それは、私が最も大切にしている仕事、ファシリテーションについても発揮される。ファシリテーションという行為や考え方について、私は馴染みすぎてはいないだろうか。かつては感じ取っていたこと、考えていたことを、無頓着に素通りさせてはいないだろうか。

福井大学教職大学院にスタッフとして関わって 5 年が過ぎ、プロフェッショナルなファシリテーターとして活動を始めて 10 年目を迎えている。これまで私が感じ考えてきたことを、果たして今現在の私は、どのように感じ、考えるのだろう。5 年 10 年という節目にあたる今、ふりかえってみたい。この小論は、そのような私個人のささやかな願いから書き始められる。

2. すぎる

教師教育研究の記憶。
福井大学教職大学院にスタッフとして関わって5年。
毎年、自分の実践や研究をふりかえり
文章に紡ぐことを求められてきた。
「教師教育研究」に掲載される文章として。

毎年、四苦八苦し、悶々とし
自分の成長のなさに忸怩たる思いを抱きつつも
たとえ未熟で不毛だったとしても
少なくとも自分自身の中に
何らかの足跡を残すような日々を送ってきたのだと
確認できる貴重な機会として、それはある。

初めての教師教育研究には
これまでのファシリテーターとしての実践だけでなく
それを支える考え方、行為、幼少時からの体験を
ふりかえって書き綴った。『ファシリテーションを想起する』と題した。

2年目は
ファシリテーションの技術を支える
技術以前の感覚のようなものをすくいとることを
試みた。『ファシリテーション以前』

3年目は
対話し、ともに学ぶ場には
ファシリテーターの欲求が映し絵のように
現れていることを思い
自分の欲求のありようを省みた。
『ファシリテーション欲求』

そして昨年は
福井大学教職大学院での営みをふりかえりながら
過ぎ行く時間の感覚が、対話の場にどのように
作用しているのかを考えた。
『ファシリテーションと時間感覚』

毎年、教師教育研究の原稿を書く際には
すべてを読み返すようにしている。
昨年はさらっと読み飛ばせたことが
今年は深いところで響いてきたり
同じ文章を読んでいるのに
読み手としての自分の内実に応じて
浮かび上がる意味が変わるのだということを
しみじみ実感させられる。

以降、私の独白に似たこの小論は
これまで教師教育研究に掲載された4つの文章からの
やや唐突とも思える引用を交えながら
書き進められる。

4年にわたるそれぞれの文章は、その引用箇所では
『想起』『以前』『欲求』『時間』
という略称で表記される。

他にも、福井大学教職大学院のニュースレーターに
掲載された私の記事も引用される。

いずれも引用箇所は
ゴシック太字で表記され
現在の私の語りと区別される。

それらは、おそらく
かつての私自身から、現在の私自身への
「馴染みすぎ」の警告のように響くのではないか。

少なくとも、2014年度
ファシリテーターとしての私は
そこかしこに「馴染みすぎ」の症状を

表していたように想起されるのだから。

3. 饒舌

私はファシリテーターであることを志してからずっと、即興的であること、創造的であることを目指してきた。揺るがず目指してきた、つもりである。

予定調和になるまい、計画に場を従わせるのではなく、場に応じて計画を再構成しよう、今まで通りの考えではなく、こんな考えがあったのか、と思われるような展開を生み出そう、これまでの常識を打ち破ってこれからの常識を創造するような場を創り出そう、と願いながらファシリテーターを務めてきた。だから、これまでをふりかえる際には「即興的であったか、創造的であったか」を基準にしたい。

そして残念ながら、2014 年度の私は、即興的でなく、創造的でなかった。ひと言で表現するなら「饒舌」であった。場を深く受けとめて次の展開を生み出したのではなく、私が、私の考えに沿って展開を生み出していたのではないかという疑念がある。望ましいことではない。羞恥と懺悔を持って、そのように想起する。

聴くことは、どんな発言も確かに受けとめてもらえ、否定されることはない、という安心感を持ってもうらうことにつながる。安心感を持ったとき、参加者は口を開き始める。
『想起』

私は聴くことに、どれだけ自覚的であっただろうか。参加者が言葉を発し始めるやいなや、その語りの傾向を捉え、これまでの経験に照らし合わせ、ここまでの展開を、これまでの経験のレパートリーにカテゴライズし、自動化されたリアクションを返してはいなかっただろうか。

場数を踏めば踏むほど、相手の言葉を新鮮に受け止めるのが難しくなる。少し聴いただけで、表面を受け止めただけで、わかった気になってしまうが、その実相は、自分のこれまでの経験や知識に当てはめて理解した気になっているにすぎない。その難しさにさえ鈍感になっていくのを感じる。

浮かび上がった展開に自然にそっているつもりでも、実際は自分の稚拙な論理に場を従わせていることがある。出された発言の中で、自分に理解できる明快な部分だけをつなぎあわせて展開させる暗愚に陥る。あいまいで言葉になりがたい部分にこそ発言の本質が宿ることは多い。にもかかわらず、明快な部分や、自分の意図にそった部分にだけ理解の目を向けてしまう。他者の発言の未知なる意図を、自分の論理という安易な既知に当てはめて読み取ったつもりになる。
『以前』

即興的であるとは、何よりもまず、その場に生じる文脈を瞬時に掴むことから始めなければならない。文脈をつかまない即興は、即座の行為ではあっても、ファシリテーションではない。場の文脈に自らを馴染ませ、そこから感じとられるものを展開として生み出していかねばならない。

場数を重ねるにつれて、自分の思考パターンに馴染みすぎてしまい、その枠組みの中で場を掴もうとしてしまう。「〇〇になったら□□」「△△からの〇〇への展開」といった幾種類もの場を動かすパターンが蓄積されているので、いかに使いこなすかに思考が傾いていく。それは私が目指す即興のファシリテーションではない。しかし、抗い難く生まれ続ける甘い誘惑としてある。

カナヅチを持てば、でっぱりは何でも釘に見えるのと同じく、混沌を見ればさっさと整理したくなる。そうやって早々にわかりやすく整理整頓した結果が、こじんまりとしたつまらない落ち着いた場。もっと言いたいことがあったけど、なんだか整理されてしまったし、それはそれで正しそうだし、あれだけきちんと整理してくれたことを壊すのも悪いし、話すのはやめようか、という雰囲気。私の不安と自己顕示欲とがんばりが場をつまらなく鎮めてしまう。
『欲求』

その場に起きていることの意味を掴むために、何らかの認識の枠組みは使わざるを得ない。でなければ、あらゆるものが無知秩序でバラバラに存在するようにしか見えなくなるのだから。机は机であり、物は上から下に落ちるのであり、右の反対には左がある。こういった基本的な認識の枠組み、それらの組み合わせとしての複雑な認識の枠組みを活用しながら、私たちは場を受け止め理解するしかない。

しかし、そのようなプロセスを経て自分が認識していることに無自覚になれば、複雑で多様な表情と意味を持つ場を、

安易な出来合いの枠組みに閉じ込めて、そこからの様々な豊かな展開の可能性を摘み取ってしまうことになるだろう。

対話を豊かにするためには「これまで」が持つ慣性から自由になって、「これまで」の自分を保留して場に臨まねばならない。ファシリテーターが自らの「これまで」にとらわれる時、その場は、しなやかさを持ち得ない。対話する今ここに流れる一回限りの、固有の時間の流れの中に自らの身を置くことが求められる。「これまで」の自分を放擲して、今ここの場に、身を投げ出すようにして。

『時間』

「これまで」の自分が培ってきた物事の捉え方、思考の進め方、場を動かす技術は、「今ここ」で場に向きあっている自分を支えてくれるのは確かだが、そのような自分を肯定しきっても良いのは、私がこれまでに培ってきたあれこれが「完全に正しいもの」である場合に限られる。完全に正しいのであれば、それに頼って場を受け止め、動かせば良い。そしてもちろん、私が「完全に正しいもの」を身につける日など、永遠にやってこないし、「完全に正しいもの」とは何であるのかが定まることもありえないだろう。

にもかかわらず、いつの間にか、自分の持ち合わせているものを前提として場を捉えて、その自分を疑わない。そんな機会が、気づかないくらい少しずつ増えていき、そんな機会に目をつむり自己欺瞞するスキルも少しずつ強化され、もはや即興性も創造性も失われたファシリテーターの姿をさらすことになる日を恐れる。

4. 新参者

あることを毎日、毎日繰り返せば繰り返すほど、それは自分にとっての「当たり前のこと」になり、繰り返し始める前には「初めてのこと」だった事実を忘れていく。ある日、いつもの「当たり前のこと」とは違うことに出会った時、「間違ったこと」や「異常なこと」として、ある時は否定し、ある時は素通りするようになる。

引越しの記憶。
20年ほど前、初めて会社に勤めた私は
転勤を繰り返す日常を送っていた。
同じ部屋に一年以上住んだことがないくらい。
引越しを繰り返しながら
自分の荷物は次第に減っていき
同時に、自分に対する執着も減った。

転勤を繰り返すということは、いつも新参者だということで、いつもわからないことだらけだった。意味がわからないことは何でも質問した。もともといる人にとっては当たり前になっていることが見えやすかったのか、その職場を少し離れた目線で観察するようになった。新入社員でもなく、ずっとそこにいるわけでもなく、会社のことは知っているけれどそこでは新参者という立場は、中間に立っているような感覚だった。偏りのない目線で見つめ、問いかける感覚がわかった気がする。

『想起』

確固たる自分の立ち位置を築くまもなく
漂うように部署から部署へ、部屋から部屋に
私は移動し続けた。

その移動の日々が
私の中に、物事の多面性を見出す目を
授けてくれたように思う。

物事の意味はひとつに定まらない。
しかし、ある意味に馴染み過ぎた人は
例えば、その部署に10年もいる人には
その意味を疑うことが難しくなる。
中途半端な新参者の私には、それが見えた。

私は今も
中途半端な新参者の目線を持ち続けることが
できているのだろうか。

ファシリテーターとして過ごしてきた10年の時間が
私から中途半端な新参者の視座を
少しずつ奪ってきたのではないか。

本当は、そんなに単純ではないことを
いとも簡単に理解した気になり
共感したふりをする自分に対して
疑いの目を向ける姿勢を失いつつあるのではないか。

○

自分に対して疑いの目を向けること、自分の現在の能力の上限値を高く見積もりすぎないこと。それとバランスする形で、私は場に集う人の力に頼ること、多様な人が集合する場の可能性に期待することを心がけてきた。私は自分を信じないからこそ、場を信じてきた。場を信じる自分の姿勢を信じるからこそ、自分への不信に耐えるのは難しいことではなかった。

自分を信じすぎないことと場を信じることのバランスが崩れるのは、想像以上に容易だった。そのバランスが、私の「幸運にも多様性に満ちた」キャリアに支えられていたのだと、今になって気づかされる。会社員として転勤を繰り返し、転職し別の会社を経験し、ファシリテーターとして独立してからは、想像がつかないくらい多様なテーマを扱うようになった。そのようなキャリアは、私の中に、「自分で答えを出す能力」への不信と、「自分がわからなくても、場には何でも揃っている」という開き直りのような信頼感を育んでくれていた。

場が停滞してくると早く打開したくて、「あれをやろうか、これをやろうか」と内心に予断を持って場を視てしまい、状況から乖離した稚拙な判断でむやみに仕切って参加者の意識を置き去りにしてしまいがちだ。下手に仕切るくらいなら、停滞の気まずさに耐えて、いや気まずささえ保留して、その状況を視て次へのヒントが現れるのを待つくらいがいいと思う。追い込まれるたびに「自分は何も知らない。何も望まない。何も失わない」と自分に言い聞かせて場に向きあうようにしている。

『想起』

何が起きても「何も失わない」という開き直りは、経験とともに大きくなっているが、「自分は何も知らない」という自分の限界に対する謙虚さや、「何も望まない」という場に対するコントロールを手放す感覚が弱くなっているのは、否定できない。開き直って、謙虚さを忘れ、コントロールしようとするファシリテーターは、単なる尊大で饒舌な存在となるだろう。私の中に溜め込まれた経験のレパートリーが、場に対する謙虚さを曇らせる。

5. 曇る

福井大学教職大学院のスタッフとして、毎年、いくつかの長期実践報告を読み解いていて、私の中に、多様な時間の流れを貯えてきたはずなのに、私の謙虚さは曇りへの誘引にさらされ続ける。

私の中に貯えられた時間の総量が私の実体験の総量と大差がなかった頃、私の日常に流れる時間はめまぐるしかった。例えば幼少期は、まさにそのように時間が流れた。

『時間』

年齢を重ねると月日が経つのが速い、というけれど、速いのはおそらく、日常に多様に生起し続けるあれやこれやの出来事や感情を、身につけた受け止め方の枠組みで単純化して受け止めるから、受け止める際のエネルギーを節約しているからだろう。幼少時の私は、生起するあれやこれやを、いちいち過敏に受け止めて驚き、悲しみ、喜んでいたのだから。

ファシリテーションにおいて、生起するあれやこれやにいちいち幼児のように過敏に反応していては、場を俯瞰し構造化することはできない。節約されたエネルギーを、瞬時の俯瞰や構造化に振り向けることができるなら、ファシリテーターとしての熟達と呼べるだろう。しかし、エネルギーの節約の先には、惰性、怠惰への誘惑が口を開けている。場を捉えるアンテナの鋭敏さは失われ、次々に生起している展開のヒントを見逃し、ちょっとした逸脱は身につけた技術でいとも簡単に軌道修正するか排除できる。そのような「馴染みすぎた」ファシリテーターの目に映る場は、鋭敏なアンテナを持つファシリテーターの目に映る場に比べて、ずいぶんと平板で、多様性や変化に欠けたものになり、だからこそ場を動かしたい欲求に耐えられず、自ら変化を起こそうと「饒舌」になる。経験によって身につけたと思い込んでいる「語るべき言葉」を持ち、傲慢になっていることに無自覚だから、いとも簡単に饒舌への道が開かれる。昨年度の私は、例えばこのような道を辿っていたのだと思う。

誰がどんな気持ちで参加しているか何もわかっていない状態で始まる。「始める」より「始まる」がふさわしく感じる。私の意図、準備にそって始めるのではない。その誘惑を恐れる。何をどのように語り始めればいいのか探りながら始まる。ひとりひとりの表情や姿勢とそれがつながりあって漂う場の空気を感じ取りながら、互いの感覚をすりあわせるように、ゆったり言葉を紡ぐ。波長をあわせ、ハーモニーが響くことをイメージしながら紡ぐ。
『想起』

場をいかに展開していくか、ヒントは必ず場の中にある。ファシリテーターとしての私の中から何かを繰り出す必要はない。場を深く感じ取れば、私と場との間に次の展開の予感のようなものが必ず立ち現れる。それをすくい取って実際に場を展開していくのが、ファシリテーターにとっての即興性であり創造性だと思う。即興も創造も、いかにも能動的な意味合いを帯びた言葉だが、ファシリテーションにおいては、かなり受動的なところに生まれるもののように感じている。

場を受け止めなければ即興できない。場に浮かび上がるヒントを即座にすくいあげてこそ創造的な展開が生み出せる。始まりは常に場にある。私の内面ではない。私の内面よりも場を優先する考え方が、経験のレパートリーの貯えが増えるに従って曇ってくる。経験を積めば積むほど場に対して鋭敏になるべきなのに、アンテナは鈍り、ヒントをキャッチできず、私の内面にある「語り」を語ろうとする欲求に振り回される「饒舌」なファシリテーターに陥る。饒舌に語っている間は、巧みに言葉を紡ぎだす自分の能力こそが即興的で創造的だと愚かにも思い込む。私は語りが巧みなファシリテーターを志したのではなかった。問いかけ、余韻を響かせ、ともに考え学ぶ場を生み出すファシリテーターをこそ志している。志を巧みに語り自己満足さえする饒舌さを恥じる。

ファシリテーターとして、受け身であることを肯定的に捉えたい。場に対して、自分が何かを「しよう」と思うのではなく、場から受け止め、場に「うながされる」ように、何かを「させられる」ように、心身をゆるめておく。能動的に何かをがんばって「する」存在として自分を置いてしまうと自然体が失われるような気がする。場に対して自分の心身をアンテナにして開くような感覚。そのアンテナは、自分ががんばろうとするとすぐに閉じてしまう。キャッチできなくなる。
『欲求』

経験が少ない時、「する」ことは頑張ることであり、力を尽くすことだったかもしれないが、経験とともに、「できる」という思いが頭をもたげてくる。「できる」と思えることを「しない」方が、頑張らなければ「できない」ことを「しない」よりも困難だと感じられる。自分には「できる」のだという思いが、ファシリテーターとしての抑制を解除し、場に対して能動的に働きかけすぎてしまう。「できる」からこそ効果的に「しない」を使えるはずなのだが、「できる」自分を顕示する欲求に負けてしまっているのかもしれない。または、「しない」ことによって場の不確実さが高まることを厭うてしまっているのだろうか。

饒舌な、論理的に整理整頓してくれるファシリテーター一人の力よりも、複雑で多様な場と「受け身の」ファシリテーターの間にこそ即興と創造が生まれると信じているはずなのに、自己顕示と確実性への欲求が、隙あらば入り込む。経験とともにそのような隙がなくなれば良いのだが、その気配はない。

ファシリテーターとしての私自身の利己的な感情も扱いに悩むものだ。前に立っている時点ですでに注目を集めており、そこでの視線の圧力は、馬鹿と思われたくない、立派なことを言いたいなどの感情を生み出していく。評価されたい欲求を消すことはできないので、正解を「語る人」としてではなく、思いを「聴く人」として評価されることを目指すように気持ちを切り替え、自然体で場に向きあうようにしている。
『想起』

場に自然体で向きあう時、流れが見え、展開が浮かび、言葉が生まれる。そんな言葉こそが場に響くのではないか。準備された美しい明快な言葉よりも、その時その場の意味の流れの中に自分が同化した時に生まれる言葉にこそ力が宿るのではないか。
『以前』

深く聴き、引き出し、湧き上がらせ、結び、交わりが生まれ、紡ぎ出されるような場をこそ創りたいと、ずっと志してきたが、ここに至り、この「創りたい」という能動的な思いが、根本的な部分で私のファシリテーションを曇らせるのかもしれないと思い始めている。ファシリテーターは場の「制

作者」ではないのに、私はそうあろうとしてしまっているのだろうか。「制作者」でないとしたら、私が目指すファシリテーターとは、何者なのだろうか。

6. 誰か

私は、過去の私が紡いだ文章をやや唐突に引用しながら、それに触発される形で、現在の私の思いを書き進めてきた。「過去の私の文章を読む」、「過去の光景を想起する」、「現在の私が対照される」、「現在の私の考えを紡ぐ」という順序で、私の脳裏の思考は巡っているように思われる。

いったい、この文章を書き進めているのは誰なのだろう。過去の私の文章がなければ、現在の私がこのように文章を書き進めることはなかった。そしてもちろん、現在の私が考えなければ、過去の文章は過去の文章にとどまるしかない。

何も私個人に限った話ではない。日々出会い、語り、聴く、様々な人たちがいなければ、私はこのように文章を書くことはない。不完全で断片的なあれこれが、現在の私を触発し、私にこの文章を書かせている。私は自分が「口述筆記者」のようにも思えてくる。世の中に、自分の内面に漂うあれこれに、ランダムにアクセスしながら、そこから立ち現れてくる思いを、大きな何者かの口述を代弁するようにこの文章を書き進めているように思えてくる。

カフェの記憶。
昼下がり、ショッピングセンターの中にある
カフェの一人席に佇む。

テーブルの上にはリングノートとコーヒー。
教師教育研究の原稿のために
考えをまとめようと、ノートに向きあう。
昨夜まで考えていたメモが書き散らされている。

周囲には、買い物帰りの、休憩の、暇つぶしの
さまざまなカテゴリーの人たちが
さまざまなことをしている。

勉強する学生
おしゃべりする女性グループ
雑誌を読むサラリーマン
子供をあやしながら和む母親

空いている席の方が少ない。
空間は人と声で満たされているように感じられた。
たくさんの声が重なりあって、響く。
言葉は聞き取れない。
グワ〜ン、グワ〜ンと響く。

私が自分のノートに興味を持ちながら
そこに座っているのと同様
他の誰もが、ともにいる友達や子供や雑誌に
興味を持ちながらそこにいるだろう。

しかし、一方で
私がノートに書き足していくメモの中身は
この昼下がりのカフェのこの声の響きあいの中でだけ
生み出されたものだと思える。

グワーン、グワーンを聞いていても
おしゃべりする女性グループに目を向けても
原稿のための具体的なヒントが
あるわけではないけれど

私は確かに、この場に影響されて
アイディアを膨らませ、メモを書き足していた。

もしかしたら、いや、おそらく他の人たちも
互いのテーブルで起きていることに
興味などないにしても、何らかの影響を受けながら
自分たちの行為や言葉を生み出しているだろう。

ノートに書き綴られるアイディアは
自室で机に向かっていた時のものよりも
生き生きとしているように感じられた。

おしゃべりに熱が入っている女性たちは
ここが寂れた空席だらけのカフェでも
同じような言葉を紡ぎだすだろうか。

雑誌を読んでいるサラリーマンは
ここが駐車場に停めた車の中であっても

同じような思考が巡るのだろうか。

混じりあう思考、言葉
もともと無縁で、切り離されたグループ
共鳴するグワーン、グワーン

昼下がりのカフェに
たまたま集った私たちは
互いの内面に何かを共創しているのではないか。

ここには何かが生まれている。
だとしたら、この場のファシリテーターは
誰だろうか。

私は、勉強する学生に、おしゃべりする女性に
雑誌を読むサラリーマンに触発されている。
コーヒーにも、ただようドーナツの匂いにも
窓の外を通り過ぎる老人の姿にも触発されている。

どの要素が欠けても
その時のメモは生まれなかっただろう。
そこには、私にとっての豊かな場があった。
アイディアが生み出されてくる
即興的で創造的な場が、確かにあった。

ファシリテーターは誰だったのだろう。

○

何か大きなものに包まれているような感覚だった。目の前にいるここの 30 人を感じつつ、つながりあったひとつの生命体と向きあっているような感じが深まっていった。自分もその生命体の一部になっていく感じさえした。
『想起』

私のファシリテーターとしての仕事は、バラバラの中につながりを紡ぎ、コミュニティへと促すことかもしれない。しかし一方で、その仕事を前に進める力は、まさに目の前で紡がれていくコミュニティから受け取っている。私が目の前の人に何らかの力を行使しているのではなく、まるで種が芽生える光景を見つめることで、生きる指針を教えられるかのようだと感じる。
『想起』

ファシリテーターとしての私と、ファシリテートする対象としての場。そのように 2 項が向きあうように捉える時に、すでに、より良いファシリテーションへの道は閉ざされているのではないか。ファシリテーターは、十分に場に対してアンテナを開いた時、場にファシリテートされ、ともに場を生成する仲間として関わるようになり、さらには場と一体になる。そのような経験は、少ないけれど、確かにあった。

人が人に向きあうのではなく、場という何か大きなものにアクセスし、とけあうようにできた時、結果としてファシリテーターになっているのではないかと思う。もはや、ファシリテート「する」という感覚がそもそも、違っているのではないか。場という大きなものに心身を開いてつながっていくことが、ファシリテーターに「なる」ということであり、「なる」が成就した時、おのずから「する」が結果として生じているのではないか。

自らが多大な影響を受けるコミュニティの歩みを生成する営みに自らも加わり、その営みの中で自らのありようも生成し続ける。このような生成の円環の中でファシリテーターとしての私は、ささやかながら、その力量を磨いてきたという実感がある。生成のまっただ中にいることでこそ、あらかじめ定めた道を歩むのではない生成する対話のファシリテーターを志し続けることができる。
『時間』

7. 初心

福井大学教職大学院というコミュニティにスタッフとして参加して 5 年が過ぎた。私は数多いスタッフの中の一人に過ぎず、このコミュニティのあり方を決めているわけでもなければ、ファシリテートしているわけでもない。がしかし、他のスタッフがそうであるように、それぞれのあり方とその交わりがこの大きなコミュニティのあり方に影響を与えていることも確かだろう。そのように、仲間とともにそのあり方を生成し続ける大きなコミュニティの一員で「ある」ことによって、私はファシリテーション「する」ことが可能になっていると感じられる。私個人の秘めたる研鑽だけではファシリ

テーターに「なる」ことは困難だっただろうという思いとともにこの５年が想起される。

にもかかわらず、私が「饒舌」なファシリテーターに陥るのは、コミュニティに対する「馴染みすぎ」があるのではないかと思える。非常勤講師である私が馴染み過ぎるほどの接点を持つことはないのだが、次々とスタッフが入れ替わっていく中で５年を過ごしているのは長い部類に入り、そこには心理的な馴染みすぎ、油断、不遜、思考停止が入り込む隙はいくらでもある。常に自分を律しながら、コミュニティに対して新鮮な態度を取り続けることを、私の未熟さが邪魔する。

教育実習歴もない僕が、この教職大学院のスタッフに加えていただいたことの意味を、皆さんとの対話の中に探し求めていきたいと思っています。どのような態度、考え、プロセスが豊かな対話を生み出すのか、より良い対話は何を変えうるのか、を探し続けようと思います。対話を見つめること、対話の中に混じりあうこと、対話から学ぶことがが、何より好きですし、そこにこそ過去を読み解き、将来を拓く意味が埋まっているはずですから。

『Newsletter No.22　自己紹介』

５年前の自己紹介の言葉が、照れ臭く、眩しく響く。馴染みつつも、初心を忘れず、馴染みすぎないで「いる」こと。「馴染む」と「馴染みすぎる」の間に広がる、微妙な中間にとどまってこそ、即興的で創造的なファシリテーターに「なる」ことができるのではないか。

いとも簡単に易きに流れる自分の未熟さを省みる時、この微妙な中間領域に止まり歩むことは、フカフカのマットの上に置かれた平均台の上を歩むことのように思える。倒れ込んでしまえば、柔らかいマットが受け止めてくれるのに、どうやったらこの細い道を歩み続けることができるのだろうか。

省察が幾重にも塗り重ねられ、意味が生成し変容していく。点ではない、流れとしての現実を感じる。体験をともにした仲間にも同じことが起きるだろう。いつかまたどこかで、仲間と合流し、意味を生成しあえる予感と期待が浮かぶ。もしかしたら、視界に捉えきれぬ巨大な流れの中に、すでに私たちはいるのかもしれない。

『Newsletter No.58
大教大スクールリーダーフォーラムレポート』

使命をわかちあう全国から集った仲間との対話は、数百人の規模であっても響きあう。異なる現場で生まれ、紡がれてきた異なる物語を、教育の、学びの「これから」をひらく壮大な物語として、仲間とともに紡ぎ直していくような壮大な感覚がある。その時、私は、ゾーンのコーディネーターでも、テーブルのファシリテーターでもなく、使命をともにする仲間の一人になる。

『時間』

仲間とともに大きな流れの中にいることを忘れないこと。大きな流れの先に、大きな理想を描いていることを忘れないこと。馴染みつつ馴染みすぎない狭い平均台の上を歩みながら、ファシリテーターで「ある」ためには、仲間とともに目指す先を見つめ続けることが必要だと思える。

しかし、あらためて問い直す必要がある。仲間とともにある私は、どこを目指しているのだろう。あれやこれやに馴染みすぎ、饒舌なファシリテーターに陥った私は立ち止まり、今の自分の言葉で、どこへ向けて進もうとしているのかを紡ぎ直さなければならない。

8. 人間

ドライブの記憶。
次の仕事までに少しの時間ができた。
少々の回り道をしても間にあう。

きまぐれにハンドルを切り
目的地への道から外れた。
この道に車を走らせたのは、いつだっただろう。
初めてに思えるくらい、久しぶりの道。

ナビゲーションの画面を確認し
今、自分がどこにいるのかを理解する。
だいぶ町の外れに来ているようだ。

そういえば、以前この道をドライブした時は
古い車でナビが付いていなかった。

新鮮な景色が流れていくのを心地よく見送り

つかの間のドライブを楽しんでいた。

ふと気づくと
この先の道が画面から消えている。
たまに起こす機械の不調。

道が消え、自分が向かう先に
何が待っているのかわからなくなった。
唐突に湧き上がる楽しみ、好奇心、踊る心。
あの坂を登ったら何が見えるのだろう。

見えた、下りだ、長い下りだ。
おぉ、田んぼに向かって飛び込んでいくような
なんて素敵な下り坂ドライブ。

つかの間、不思議な快感を得た。
次の瞬間には、ナビが正常な表示を回復した。
私もいつものドライブの感覚に戻った。

ナビがない古い車を運転していた頃
そして、町の道にも馴染んでいなかった頃
私は、ありとあらゆる視覚情報を頼りに
なんとか目的地にたどり着こうとしていた。
目に入るものすべてを手掛かりにしていた。

あの店の角を曲がって
次の信号は、どっちだ、右か、左か
標識はどこだ、誰かに尋ねようか
ここが〇〇町だということは
目的地のすぐそばのはずだ

思考は目まぐるしく働き
独自のルートを発見さえした。

いつしか私は道に馴染み
車にはナビがつき
風景の変化に鈍感になった。

〇

県教育研究所の研究発表会の最後に『ロボットは東大に入れるか』という講演を聴き、人間には何ができるのだろうと、思いを馳せた。

人間だからこそできることがある。研究所の内外で積み重ねられた実践と対話。それを支えた意気込み。高揚に感化された胸の弾み。すべての発表に込められた深い願い。教室を渡り歩きながら共鳴し、触発し、明日への展望を生み出しあったこの日の営み。このような豊穣を実現する人間になるためにこそ教育はあるのだと私は確信した。その確信の論理性をロボットのように検証することはできあに。しかし、人間である私には、他者との対話の中でその確信をより豊かなものへと更新し続けることができる。

『Newsletter No.60　県教育研究所研究発表会レポート』

私は人間だからこそできる、即興的で創造的な能力を引き出し育みたい。そのような場を生み出すファシリテーターになりたい。いや、私が生み出すわけではないが、ともにそのような場を生成するファシリテーターでありたい。

これからの知識基盤社会において、ますます多くのことが機械に置き換わっていく。人間の仕事、人間の営みだったものを機械が代替していくだろう。そのような時代の中で、豊かに楽しく生きていくには、人間だからこそできることに力を集中することだと思う。

人と関係を結ぶこと、深めること、チームになること、社会を創ること、考えること、ひらめくこと、発展させること、ふりかえること、反省すること、無関係の中に関係を生み出すこと、組みあわせること、混ぜあわせること、融合すること、想像し創造すること、綜合すること等々。これらのことを完全に機械に任せることは、おそらく不可能に違いない。機械を使いこなしながら、これらのことを営んでいくのは、人間だからこそできることのはずだ。人間の営みを機械に侵食されるに任せるのではなく、人間だからこそできることをより高度に深く実現できるようにならなければならない。そのために、ファシリテーションという考え方は、きっと役に立つという確信がある。

一方で、これまで長々と言葉を紡いできたように、ファシリテーションとは、積極的に「する」ものではなく、まず場を受け止めるものとしてある。ファシリテーションを突き詰めていきたいが、突き詰めれば突き詰めるほど、ファシリテーターとしての存在感を次第に薄れさせていかざるを得ないと予感している。私の思考を深く触発したカフェという場に、明確なファシリテーターが見当たらなかったのと同様、人間だからこそできる即興的で創造的な場には、明確なファ

シリテーターはいないのではないか。いや、おそらく、誰もが互いを触発するファシリテーター的な存在に「なる」ことこそが、これから開くべき領域ではないか。

9. 途上

空き地の記憶。
近所の友達と、近所の空き地で
戦争ごっこをして遊んだ。

ドラム缶は秘密の隠れ家になり
積まれた大きな庭石は要塞になった。
そこには、幼いながらも壮大な戦場が立ち現れた。

別の日、同じ場所で、違う友達と
テニスボールで野球をした。

地面にはベースが描かれ
草が生えているところがホームランゾーンになり
木がファールの目印になった。
先日の戦場は霧消し、こじんまりした球場が立ち現れた。

近所の空き地は
戦場であり、球場でもあり、そしておそらく
女の子たちには、別の何かだったのだろうし
大人たちには、所有権やお金が関係する
難しい何かだったのだろう。

あるものの意味は、定まらない。
誰とともにあるか、何とともにあるか。
どのような文脈の中に置かれるかによって
常に移ろいゆく。

空き地が戦場にも球場にもなったように、同じ文章を引用しても、どのように眼差し、どのように並べるのかによって、そこに立ち現れる意味は異なるだろう。自分が過去に書いた文章であってすら、その意味は常に定まらず、途上にある。ここまで過去の自分の文章を引用してきたが、ここまでの順序とは違う順序でそれを引用していくならば、引用と引用の間に現在の私は違う意味を紡ぎだすのだろう。同じ素材から全く違った展開が生み出される可能性は常に開けているだろう。

「である」という糸で紡がれた布はいつも、「かもしれない」へとほころびていくことをうけいれねばならないのではないか。行為を縛りつける丈夫な布ではなく、行為に寄り添うしなやかな布を求める。それはもしかしたら、何もまとっていないかのような不安、そこまでいかなくとも、破れた布をまとっているかのような不安とともにあることかもしれない。しかし、その不安こそが行為を豊かにしていく力を与えるのではないだろうか。
『以前』

意味が定まらない不安は、安易に定められた意味への誘惑を常に生み出すだろう。「馴染む」から「馴染み過ぎる」への橋渡しを気づかないうちにしてしまうだろう。常に定まらず、移ろう不安とともにあること、不安とともに歩むために、仲間とともに目指す理想を描き、絶えず更新すること。問い続けることを、遊ように楽しむこと。

今回のZone Dは、私たちに何を残しただろう。掲げた問いの大きさに比して過ごした対話の時間はあまりに短く、達成感より、さらにとい進めなければならないという教師としての責任や意欲が残されたように感じた。途中、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるようになるのでしょう？」という問いは、問いとして響き続けるからこそ、そのような授業が可能になるのかもしれない。
『Newsletter No.71　ラウンドテーブルレポート』

考え尽くすことなどできはしない。少なくとも私には、そのような力がない。何を考えても、何をつきつめようとしても、どこまでいっても、常に途上にしかない。あらゆる努力のかいもなく、私の手に残されるのは、不完全な形をした思考の断片、姿を変えた新たな問いにすぎない。それでもなお、自らを更新し続けるべく、考え、実践し、対話し、省察していくしかない。そうあってこそ、私はファシリテーターで「ある」ことができるのだから。

読後、思考は整理されるどころか、拡散した。希望への拡散。感じ得なかったものを感じられるようになる光明への拡散。著者センゲは言う。「真の学習は『人間であるとはどういうことか』という意味の確信に踏み込むものだ」と。わかった気になりたがる自分を厳に戒めなければならない。道のりは長い。学びは常に途上にある。
『Newsletter No35　書評「学習する組織」』

馴染むことと馴染み過ぎることの間に広がる微妙な中間領域を歩むことは、永遠に答えの出ない問いを問い続けることなのだろう。問い続けることによってのみ、歩みは転落を免れ、その道のりを人間だからこそ感知できる喜びと充足で満たしてくれるに違いない。

即興的で創造的なファシリテーターとは、そこに至る道が常に途上であるからこそ、かろうじてそのようで「ある」ことができるものなのだと、途上にある私は、不完全な答えを導き、前を向き、次の一歩を踏み出す。

○

自転車の記憶。
少し前、ずっと欲しかった自転車を買った。
乗りこなすのが少々難しい
スポーツタイプの自転車。

極端な前傾姿勢で
タイヤは小さく不安定
思わずハンドルを握る手に力を入れると
自転車はグラグラとさらに不安定になる。

わずかの試行錯誤の後
乗りこなせるようになった。

前傾姿勢でペダルを踏み込むと
道路を攻めていくような快感がやってくる。
初めの恐怖は、自在に乗りこなす快感に変わった。

補助輪をなかなか外せなかった幼少時のことを
つかの間、思い出した。

あの時、近所の友達に勇気を引き出され
力強くペダルを踏み出していたからこそ
今、この難しい自転車にも乗れる。

体の一部のように馴染んでいるが
地図も持たずにサイクリングに出かける時
私の心はいつも新鮮に沸き立つ。

（了）

引用文献
私が過去に紡いだ言葉のみを引用してきた。

教師教育研究
・4号「ファシリテーションを想起する」(2011)
・5号「ファシリテーション以前」(2012)
・6号「ファシリテーション欲求」(2013)
・7号「ファシリテーションと時間感覚」(2014)

教職大学院Newsletter
・No.22　スタッフ自己紹介（2010）
・No.35　書評「学習する組織」（2011）
・No.58　スクールリーダーフォーラム in大教大レポート（2013）
・No.60　福井県教育研究所 研究発表会レポート（2014）

参考文献
読みこなしたとは、とても言えないが
大きな触発を受けた。

「動きすぎてはいけない
ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学」
(2013年　千葉雅也)